

相手のことも考えよう

校長 森 和 久



7月の生活指導のめあては、「相手のことも考えよう」です。これは、まず自分のことを考え、その上で、相手のことも考えるという、自他の尊重という意味が含まれている目標です。この「自他の尊重」ということは、言うまでもなく、社会を生きて行くに当たって極めて重要なことなのです。

本校の説明会においても、またこの学校通信においても、社会に出て必要となる「コンピテンシー」の重要性について述べさせていただいていますが、高い業績をあげている「コンピテンシーの高い人」には、次のような行動特性があるとされています。※

- 1) 異文化での対人関係の感受性が優れている。外国文化を持つ人々の発言や真意を聞き取り、その人たちの行動を考える。
- 2) 他の人たちに前向きな期待を抱く。他の人たちにも基本的な尊厳と価値を認め、人間性を尊重する。
- 3) 人とのつながりを作るのがうまい。人と人との影響関係をよく知り、行動する。

この行動特性が重要であるという前提に立ち、OECDは、コンピテンシーについて世界規模で考えるプロジェクトを立ち上げ、2003年には、鍵となるコンピテンシーの定義と選択に関するまとめを出しました。ここで出された考え方は、日本における新しい学習指導要領の一つの拠り所ともなっています。

このプロジェクトで打ち出された「キー・コンピテンシー」の一つの柱に「社会的に異質な集団での交流」があります。そして、この柱の下位概念とし

て、「他者とうまく関わる力」「協力する力」「対立を処理し、解決する力」を挙げています。

前の2つは、従来日本でも重要視されてきたことですが、最後の「対立を処理し、解決する」ということを初めて見たときは、対立があることが前提とされているという点で、いかにも国際的な見方だなと感じました。

そして、このプロジェクトでは、対立について次のように述べています。※「全面的に避けようとか、排除したりしようとせず、賢明で、公正で、効率的なやり方で対処することである。この能力は個人が他者のニーズや利害を考慮し、ある問題の当事者が他者を犠牲にしてそのすべての目標を達成しようとするのではなく、すべての紛争関係当事者がある程度の利益を得る（どちらにとっても有利な解決をはかる）ことが望ましいと考えることを前提としている。」

「対立を処理し、解決する力」は社会において必要なキー・コンピテンシーであり、学校教育においても伸ばしていくべき力です。学校内においても、子どもたちは、日常的に大なり小なり、様々な「対立」と遭遇することがあると思います。それは、ある意味、社会の前提であり、キー・コンピテンシーを伸ばす有益な機会です。対立の原因は何か、合意している点は何で、意見が食い違っているのは何か、何をあきらめることができるか、できないかなどを冷静に考え、「相手のことも考え」た上で、粘り強く解決策を考えるというような行動特性が見られるよう、私たち大人は適切な距離感で支援することが必要だと考えているところです。

※ 引用『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』
ドミニク・S・ライチェン他、明石書店

